

その2：訓練編

1. はじめに

前回の飼育編に引き続き「訓練編」について記述する。ここで公開する内容は、小職が今日までの約40年に渡る実戦経験で会得した訓練法（考え方）である。訓練法については、数多く報告されているが、いずれも技術的な内容が多く、初心者の方にはいささか理解されにくい感がある。そこで今回は、視点を変え、犬の立場に立った訓練法について説明する。

尚、訓練とは決して特別なことではなく、犬本来が持っている資質や本能を上手く引き出してやる・・・ということであり、決して押しつけではなく、自発的に行動させることである。

また、前回の飼育編で記述した内容で、毎日朝夕30分の運動（散歩）は、訓練上大きな要素と言える。それは、第1に「主人の臭いを覚える」、第2に「後付けを教える」、第3に「健康状態を知る」ことが可能であり、非常に重要である。少し説明を加えると、①主人の臭いを覚えると、山で逸れた場合にも臭いを辿り主人の元に帰ることが出来る、②後付けは犬の回収後における安全下山が出来る、③健康状態を知るとは、運動中に見せる、排便、排尿、歩様、元気、毛並み等が観察でき、ここで異常がある場合は適切な処置をし、決して訓練（山入り）に連れ出してはならない。人間でも身体に異常がある場合は仕事をしなくなり、また力も入らず成果を上げることも出来ない。訓練とはそういうものである。

尚、訓練編を読む前に、前回の「飼育編」を是非とも一読し本編を見て頂ければ、一貫した小職の飼育・訓練法がより理解されやすいと考えます。

2. 訓練

訓練成功の秘訣は、先ず愛犬の健康管理、愛情、家族の理解、この三つの要素のどれかが一つ欠けても日曜ハンター（狩猟・訓練は土・日のみ）では一人前の狩猟犬に仕上げることは出来ないと確信する。

犬も人間と同様に喜怒哀楽が表現でき、個性もまた一頭一頭異なることから、訓練をする前に日常管理で愛犬の性格等を十分に理解してやる事が大切である。「犬は決して人間（主人）を裏切ったりしない。裏切るのは何時も決まって人間である」

本編では、初心者にも訓練を理解しやすくする上で、例え話等を取り入れながら分かりやすく、皆さんと共に訓練犬の立場で説明をさせていただきます。

2-1. 生後2カ月（人間年齢：約5才）

この間は、仔犬の選択及び入手の期間である。この期間は、仔犬にとって一生が左右される。プロ野球で言えば新人ドラフト会議みたいなもので、自分で希望するところへ行くことが出来ないことから可哀想な気もする。

仔犬達の心情を考えると、ご主人様（繁殖者）がお金などに目もくれず、本当に自分達（家族：系統）に理解のある方（新しい主人）に分譲してくれることを祈っていると思う。

ここで仔犬の入手と入手時の心得等について説明しよう。

（1）仔犬の入手

自分の周囲に適当な仔犬が見つからない場合は、全猟誌の広告やインターネット等で求める方法が一般的と思う。そこで先ず目に入るのが何々系とか何々系統と言う言葉で、これに初心者の方は頭を悩ます。

この系統の選択が、後で述べるが、自分の気に入る犬にするための最大のポイントで、この系統がもたらす遺伝的特性を訓練で磨きをかけることは出来るが、排除することは出来ない。極端かも知れないが「山入りさえ教えてやれば仕事は系統がする」と言っても過言ではない。

だから両親が仕事（狩り）をするからと言う広告で安易に入手（購入）するのではなく、自分の猟場の条件（大山、小山、茶畑、砂地等）も考慮に入れ、信用できる犬舎（ブリーダー：①系統保存を目的に繁殖している、②動物愛護管法の認可を受けている、③ホームページを開設している等）から入手することが最も理想的である。

小職が系統繁殖している犬も、繁殖者が異なれば好み（猟場の条件）も異なるし、当然、全国で飼育されている同じ系統でも時間の経過と共にかなり異なってくるのは、むしろ改良と言う点から見ればごく自然のことである。

次に仔犬の選択であるが、仔犬はみんな可愛いもので、一胎仔の中から一頭を選ぶとなると目移りしてなかなか選定できないのが普通である。小職の選定方法は、先ず性格、体構及び毛色の順に見ている。

以下、ビーグルについて記載（他犬種の説明は別に譲る）

- ① 性格：素直で落ち着きが有り、元気なこと。
- ② 体構：頭骨が良く発達し、ハウンドらしく大きな耳を持ち骨太で重心が適度に低く、乾燥タイプ（筋肉質でブヨブヨしてない）であること。
- ③ 毛色：毛色は自分の好みで良い。仔犬入手時の際、この毛色（配色）にこだわり過ぎる人がいるが、その様な人には「毛色で仕事をしてくれるのであれば皆苦勞はしない」と言っている。ショーダックと違い狩猟犬なので付けている着物（毛色）は関係ない。むしろ配色が悪い犬は、特徴があり紛失が無く、拾われたりすることもなく好都合と言える。「美人は三

日で飽きるが、ブスは三日で慣れる」・・・と言う格言もある。

小職の系統繁殖しているビーグルは、身体全体が黒勝ちで、見た目は野武士の様で可愛らしさが無いと人によく言われるが、獲物からは気付かれ難く忍者よろしく「職人」といった感じで小職は好ききである。しかし、夜間での回収の際に分かりづらく、しかも実猟で獲物と間違われ誤射される危険性もある。

予断ではあるが、小職の経験では、性格と鳴き声（獲物を追跡する時の声）は牝親に良く似て、体構と毛色は父親に似るような気がする。アウトブリード（血液関係が全くないか若しくは遠い親戚の牡を交配（入血）→近親交配の遺伝的な弊害を無くす交配方法のこと）の場合には、このことを考慮に入れ繁殖を行っている。

（２）仔犬入手時の心得

仔犬の引き取りは、出来ることなら自分でブリーダー（繁殖者）の元に出向き、色々と分譲犬について話を聞き、なるべく午前中に自宅に連れて帰るのが理想である。その際に予め洗濯したタオルを持参し、母親や同胎犬をそのタオルで拭き、体臭を十分に付けて帰り、仔犬の犬舎に敷いてやる。そうすると仔犬は安心して夜鳴きもせず、新しい環境にもスムーズに慣れ、新しい主人やその家族の愛情とあいまってスクスクと成長することが出来る。

仔犬は、大好きな母親や兄妹と別れてきており、少しくらいの夜鳴きは許してやる寛容さが必要である。決して大声で叱ったり、誰かの様に風呂場に閉じ込めたりは決してしないこと。この時が仔犬にとって主人との初めての出会いですから、このお互いの信頼と愛情が、ひいては立派な狩猟犬へ成長させるキーとなる。

2-1. 生後4カ月（人間年齢：約8才）

この期間は、仔犬と主人及び家族との、いわばコミュニケーションを作り上げる最も大切な期間である。よく先輩から、「嫁は最初が肝心、甘やかしたりしたら後が大変ゾッ！」なんて、新婚当初は頼みもしないのに親切に教えてくれたのとは多少は話が異なるので念のため。

では、仔犬と家族等とのコミュニケーションの仕方について説明しよう。

（１）性格を理解する

人間も昔、人身売買があったのはご存じであろう。さぞかし売られて行った子供達は行先不安だったと思う。ここで良く考えてみよう。買った方は、良い買い物をしたと思いきや有頂天かもしれないが、売られてきた子供等は、住み慣れた家、家族、それによく遊んだ山や川を後にして、泣きたい気持ちでも涙をこらえ・・・。来たくもなかった家に連れて来られ先輩達（この場合は犬達）には冷たくされるし、家族の人にも大事にされなかったらどうだろうか・・・。

人の出会いは最初が肝心とよく言われるが、犬の場合も人間と同じで、自分が

最も辛い時、寂しい時に親切にしてもらった恩は一生忘れないものである。

この時期に仔犬との信頼関係を作り上げることが後の訓練に大切である。具体的には、スキンシップ（犬の目を見ながら、静かに頭を手でなでてやり、優しく語りかける）を行ったり、広い場所に連れて行き、家族と一緒に遊んでやる。そうしながら、シャイ（臆病）な犬も明るくなるように元気付け、反対に少しワンパクな犬は落ち着きのある犬に仕上げて行く。決して大声で怒鳴ったり叩いたりしないこと。

この時期は、ワンパクで靴を噛んだり、庭木を噛んだり手に負えないものである。しかし、ここにはまたちゃんとした理由があるのだ。何かを噛むのは人間の赤ちゃんが何でも口にするのと同じで、もう一つは歯が生え替わるためである。むしろ怒るより喜ばなければならない。

ここでの、色々な観察を通してその犬の性格を十分に理解しておくことが、後の訓練で叱ったり、褒めたりする時に活かされるので重要である。

（２）人や他人に慣れさせる

家族とのコミュニケーションが出来たら、猟友やその先輩犬に慣れさせる。優しい家族とは異なり、大声で喋る人、乱暴な人、あるいは怖そうな先輩犬等の外部環境に少しずつ慣らして行き、不安な行動（うづくまる、帰ろうとする、尻尾を腹に巻きこむ等）を取った場合は、タイミング良く速やかに心配しないように優しく声をかけ頭を撫でてやる。これを繰り返すことによって外部環境にも慣れて行き、自信と勇気、それに主人をなによりも信頼し好きになり、人犬一体の素晴らしいコミュニケーションが芽生え、これからの苦しい訓練にも十分耐えることができるのである。

2-2. 生後6か月（人間年齢：約15才）

いよいよ山入り訓練の開始である。

貴方は、山での怖いことも楽しいことも知り尽くしているが、仔犬は全く知らないことを先ず自覚することである。あせらずに仔犬に、主人と山に来れば楽しい・・・と言うことを先ず教え、次に自分勝手には出来ないと言うことも教えないなければならない。

これが上手くいかないと足の伸びない犬（自主的に獲物を求めて山に入らず主人の足元でウロウロする犬）になったり、狩猟犬としての価値が無くなるので注意が必要である

（１）後付け

引き綱を付けた時は、必ず主人の後を歩くことを教える。犬を連れて山を降りる時に犬が前へ前へと強く引っ張ると滑っては非常に危険である。更に猟期中の銃の暴発事故の原因にもなり、この訓練は絶対かつ十分に行わなければならない。

もう一つの利点は、毎日の散歩で主人の臭いを完全にマスターしているので、山で犬が主人から遠く離れていても犬は自信を持って主人の元に帰ることが出来るので、回収のためにも重要である。小職の犬は二～三日帰らなくても必ず放犬した場所に帰って来る。

この後付け学習の方法は、最初のうちは50cm くらいの引き綱を使用して、前にと出るとキュッと素早く手前にきつく引き、同時に「後」と言う。出来るまでこのことを繰り返し行い、出来るようになると綱を少しずつ長くしていく。

次に、犬は後付けが出来ても道路の端を歩こうとするので、誘導して中央を歩かせる。

犬を奥山から回収し下山する時に多頭数の犬を連れてある際、貴方も経験があると思うが、立木の右を通ろうとしているのに左を通り、綱が木に巻き付き、下山の妨げとなる。この時犬の回収で時間を費やし苛立っているのに、更に下山の妨げで・・・とうとう堪忍袋の緒が切れて、ついに犬を大声で叱ったり、ひどい人は足蹴りにしたりして、双方が不愉快な気分になり、楽しいはずの狩猟が台無しなる。この訓練は、主人の歩いた通りに歩かせることにより、こんな不愉快な出来事を防ぐ効果が大きい。

犬は主人に獲物を与えようとして一生懸命に仕事（獲物を追跡）をしているのに、主人の都合で追跡を中断され綱に繋がれ、くたくたに疲労困憊しているのに、褒めてくれるのかと思えばいざ知らず、大声で叱られ足蹴にされたら、貴方ならどう思いますか。一度犬の立場に立ってじっくり考えてみて下さい。この様な人と再度仕事（狩猟）をしたいと思いませんか・・・。

(2) 山入り

前途した後付けが出来るとなれば、いよいよ山入りです。小職は、最初から先輩犬と走らさずに引き綱を付けたままで歩き、徐々に山に慣らしている。

新入社員が一般研修を終えて会社のことが大体分かって、新しく配属された職場でいきなり先輩にまじって仕事をしなさいと言われてたらどうだろうか。経験も無く焦りばかりが先に出て、自信を失ったり、同僚や先輩からあれやこれやと言われてれば、もう仕事なんか面白く無くなるのは目に見えている。

犬の訓練も同じことである。小職は、これらのことを考慮に入れ、最初は先輩の仕事ぶりをゆっくりと見学させ、仔犬が興味を持ち余裕が出来たら、仔犬だけを連れて山歩き（谷やブッシュと一緒に歩く）をして山の恐怖を取り除き、同時に体力や忍耐を教えている。

2-2. 生後8か月（人間年齢：約18才）

この時期は、追跡を教えるが、日曜ハンターが獲物を追える犬に仕上げる場合、先導犬（狩りの先生となる先輩犬）なしでは日数の関係で無理と申し上げたい。

こんなことを言うと、また先輩諸兄からお叱りを受けるかも知れないが、あえて申し上げます。

「うどん」を作ると仮定しよう。うどん屋の主人（訓練犬の飼い主）が、幾ら本などで得た知識があるからと言って、何も知識のない新米にああしろ、こうしろ・・・と言ってもなかなか作れるものではない。では腕利きの職人と一緒にさせ十分な期間見習いとして見学をさせたのだろうか。うどん屋の雰囲気にも慣れ、職人の仕事ぶりも一応学習し、ある程度出来る・・・と言う自信と興味がわいて来た時点のみはかり、うどんを打たせてみる。出来そうで出来ない・・・なぜ出来ないのだ！と言う悔しさがこみあげ、職人に教えを請うまで待つことである。

犬で言うと、先ず先輩犬の獲物を追う様子を何度も体験させ、訓練犬は引き綱を付けて見学をさせる。やがて先輩の追い鳴きに興味を持つようになる。そして、先輩犬と一緒に獲物を追跡したいと・・・引き綱を外せとばかに強く引っ張ったり、鳴きが入るようになる。こうなればしめたもの。あとは訓練（学習）のみとなる。

（１）主人の対応

主人は絶えず訓練犬の身になり、行動し、概ね次の事項を守ること。

- ① 日常の健康管理に注意し、訓練当日の健康チェックを必ず実施し（その１：飼育編を参照）、健康状態が思わしくない場合は訓練を中止すること。誰でも病気の場合は、特に初めてするような仕事は不安と体調不良が重なり上手くいかない場合が多い。訓練犬も例外でなく同様で、場合によっては山入りが嫌いになったりするので注意が必要である。
- ② 気が焦って、犬の気持ちを理解しないで訓練に入ることが多いので注意する。訓練犬の山入りが深いと心配し戻ってこれないのではと直ぐに呼び返したり、また山入りが悪いからと訓練犬が嫌がっているのにも拘わらず、執拗にけしかけたりは決してしてはならない。訓練犬を信用してやり、主人はゆったりと構え、あまりチョコチョコと歩きまわらず、同じ場所でじっとしておれば、訓練犬は安心して、主人の足元から遠ざかっては帰りを繰り返すようになる。そして何日が立つと、５分、１０分・・・と段々と山の中に自主的に入るようになる。これが山入り訓練である。３０分くらい主人から離れれば合格である。
- ③ どの様な腹立たしいことが有っても決して大声をだして叱らないこと。もちろん体罰は絶対してはならない。しかし、いけないことをした場合は、当然その場で直ぐに叱ること。時間をおいて叱ると訓練犬はなぜ叱られているのか理解出来ないのです、そのような場合は我慢し叱ってはならない。

訓練の上手下手は、訓練犬の「叱り方」と「褒め方」で決まると言える。

そのため「生後４か月」の項で性格をマスターしておくことを敢えて申し上げ

げた次第である。特に性格の明るい犬とシャイな犬を同時に訓練する場合は、シャイな犬に注意し、決して大声で叱ったりしないことである。貴方は性格が明るい犬を叱ったつもりでも、犬にはどちらが叱られたのか分からない。性格が明るい犬は大胆で山入りも早い、仕事（捜査・追跡）も雑な犬が多いので、この様な犬は落ち着きを持たず強制が必要である。一方シャイな犬は、警戒心が強く、叱ると言うより、むしろおだててやる方が訓練の成功率が高い。この手の犬は、一旦なんらかのきっかけで見違えるように変身する例を何度も経験している。当犬舎の作出犬で、全日本狩猟倶楽部主催の第12回全国ビーグル競技会決勝大会の成犬部門で優勝し内閣総理大臣杯を獲得した「シコクプリンス・ブーギース・マリー号」も幼犬の時は風の音にも驚くほどのシャイな犬であった（6頭の兄妹犬で最後まで譲渡先が見つからず残ったダメ犬）。

- ④ 慣れるまでは、同じ山で、かつ同じ先導犬で訓練すること。新入社員が仕事は同じでも、職場の先輩や機械が変わると慣れないせいもありミスを起こしたりする。仕事がある程度出来るまでは同じ職場で自信をつけ、徐々に変えていく方が良いのと同じである。
- ⑤ 良いことをした時は、十分に褒めてやること。特に、主人から遠くに離れて行って帰って来た時は、その都度少しオーバーに褒めてやる。それと訓練終了時には「よしよし、よくやった。よくやった。また頑張れよ！」とか、労をねぎらい、主人は満足していると言うことが分かるように「ニコニコ」しながら優しい声をかけてやること。このコミュニケーションは猟芸上達に欠かせない。まだ沢山あると思うが、小職は上記した事項を実行すれば自ずと犬にも分かってもらえるかと確信している。

(2) 実践訓練

必要な基礎訓練が終わり、いよいよ先導犬達に交じり実践訓練の開始である。先導犬は落ち着きのある、あまり足の速くない、優しい犬を選ぶこと。欲を言うとか一対一のマンツーマンでは無く、5・6頭のバック（群れ）で訓練する。先導犬がいない場合は猟友にお願いするとよい。

群集心理と言うのか分からないが、先導犬に離されてノコノコと主人の元に帰って来るようなことは少ないので、日曜ハンターでも効率よく訓練が出来る。一度是非試してほしい。小職は、訓練で最も難しいと言われている、主人の足元から少しでも遠くに足を延ばすことを、この方法でいとも簡単にやっている。

この様にして、実践訓練の回数を重ねることによって、一人前の狩猟犬として成長させていく。

訓練時の朝食のことをよく聞かれるが、小職は通常通りの食事を、犬を連れだす1時間前に与えている。但し、車に酔う訓練犬は、同じ時間に「小児用の車の酔い止め」を食事に混ぜ一緒に与えている。そうすることを2・3度繰り返すと

殆どの犬は酔わなくなる。山に入れる時は食事を与えないと言う人も少なくないが、これから重労働をすると言うのにお腹がすいては貴方も仕事が出来ないのと同じです。しかし、犬を連れだす直前に食事を与えることは絶対避けるべきです。身体が重くなり十分な仕事が出来ない。

次に、訓練時間であるが、小職も出来る限り早い時間が良いと思うが、日曜ハンターなので、朝も眠りたいと思うし、早朝から家族をお越し迷惑もかけられないと言うことで、朝6時頃に出かけ、昼頃には犬を回収し帰宅する。

この時期は、訓練犬にはまだ体力が十分でないので、嫌になったり飽きがこないうちに早めに切り上げるのが最大のポイントである。山に行くたびに疲労困憊していると面白さも半減するので、訓練犬がもう少しやりたいと言う元気が残っているところで訓練を中止すると、猟欲（やる気）も増し、山に来ることが益々楽しくなり、猟芸向上にも効果がある。

午後からは、犬と一緒にダニの駆除をしてやったりしてコミュニケーションを図れば更に良い。

2-3. 狩猟犬としてのデビュー（人間年齢：約20才）

（1）単独でのお越し・追跡

この時期になると、体力も先輩犬と変わりがないくらい付いており、山に行きたいとせがむ（鳴いてアピール）ようになる。こうなればしめたものである。新入社員が職場環境や先輩、そして何によりも仕事出来る喜びが自信となって、楽しいと思う時期である。ただ本人は自分がしている、自分はできる・・・と思っているが、いざ先輩が居ないとどうなるのかを自覚させる時でもある。

- ① 何時もの山に訓練犬1頭で行ってみる。この時、新米ハンターはよく言うことに、先導犬と行くと良く仕事（獲物を追跡）するが、単独になると足元でウロウロして山に入らない・・・等、ショックを隠せないようである。これは誰もが経験することで、ごく当り前のことである。つまり、先導犬と一緒に追跡していたのでは無く、見よう見まねで先導犬のするように真似をしていただけなのである。この時、訓練犬も主人もがっかりと自信を失う。このことをお互いが認識することが後で大きく成長するきっかけとなる。
- ② 先ず、先導犬が居ないのでキョロキョロして探す動作をするが「よしよし・・・と」絶えず優しく声をかけながら、今度は貴方が先導犬となり、何時も起こしているところ（獲物を発見している場所）まで、ゆっくりと訓練犬を誘導してやる。そして目的地に着くと、腰をおろして訓練犬と目を合わさないようにして、暫くほっておく。訓練犬は主人の元に来て甘えようとするが無視する。やがて訓練犬は、退屈になり主人から少しずつ離れ、獲物の臭いを嗅ぐようになり、何時も先導犬と追跡している臭いに遭遇すると、鼻をクンクン鳴らし尻尾

を左右に振りながら前進していく。もうこの時は怖いと言う事を忘れ、猟犬としての本能が目覚めであり、上手くいけばお越し（獲物を発見）に繋がり、大きな声を張り上げて追跡するようになる。最初はほんの1・2分で臭いを失い追跡を止めるが、この訓練犬の最初の一声が「値千金」となり、10ヵ月間の苦労が一瞬に報われる時で、本当に涙ものの感動である。

- ③ お越しが出来るようになれば、暫くは続けて毎日山に入れる。日曜ハンターは夜に山に引けばよい。夜は、殆どの獲物が夜行性であり、臭いが濃く訓練犬も容易に追跡できる。先ずはお越しより、独りで獲物を1時間ぐらい追跡出来るまで繰り返し行う。この時も犬が飽きないうちに早めに回収することが更なる猟欲向上に繋がる。

(2) 先導犬とのパックで訓練

ある程度（約1時間）追跡できるようになれば、今度はまた先導犬と5・6頭のパックで訓練をする。この時期は、かなり追跡にも自信があるため、先導犬の前に出るようになる。そして、先導犬と一緒にお越しを行い、追跡に移るが、よく聞くと追跡している声が自信に溢れ、変わっていることに気づく。これを繰り返し行うと先導犬より先に起こせるようになる。

(3) 上記した(1)と(2)を繰り返し訓練

こうなると再度、単独で山に入れてみる。今度は主人の足元には居なく、獲物を求めて遠くまで搜索するようになり、時間がかかるがじっと我慢して待つと、必ずお越しに繋がる。益々訓練犬は自信が付き、山が楽しくなる。

(4) 訓練犬から狩猟犬へ

ここまでくると訓練犬を卒業し、いよいよ狩猟犬としてのデビューとなる。

- ① 狩猟解禁となり、追跡していた獲物を撃って思う存分噛ましてやると、益々猟芸は向上し、ついに完成犬（一人前の職人）となり、今度は後輩の面倒をみる立場へと変貌をとげる。
- ② どの程度の完成度（実力）かを競うのが「競技会」であり、ビーグル犬は全国大会まである。

この全国の頂点に立つには、犬の資質とセンス（系統）がものを言う。幾ら訓練しても、遺伝的な特性は訓練では補えない。仔犬の入手の項で述べたように、系統保存を真面目に取り組んでいるブリーダーから入手することである。少くらい入手に手間（時間）がかかっても、仔犬とは今後約15年間も一緒に生活し、狩猟犬として人犬一体となって獲物を求め山野を駆けめぐることを考えれば、1年位の時間はさほどでも無くなる。

3. おわりに（訓練考雑記）

小職が実践している上記の訓練法について、技術的には何も無いじゃないかとお叱

りを覚悟で公開させて頂いた。

人間の子供たちは、塾通いで遊びを知らないため、人間本来の価値観などが薄れ、良い学校に入り、良い会社に就職し・・・というように、親に決められたコースを漠然と進み、何のためか分からない教育や技術ばかりを、内容も理解せずに暗記ばかりを強いられている。思えば可哀想である。

犬の世界でもしかり。主人も耳学問と能書きは一人前であるが、仔犬を早く一人前の狩猟犬にするための教育や技術編（訓練機も含む）ばかりが目につく。狩猟犬にとってそのような詰め込み教育が果たして良いのだろうか。狩猟犬の訓練はそんなに難しく考えない方が良いと思う。訓練犬の気持ちをさっしてやり、主人がとにかく忍耐と我慢さえすれば自ずと完成（一人前の狩猟犬）すると確信している。

最後に、良く質問される「先導犬に何時までも付けていると自主性が無くなり犬が完成しない」・・・と言うことがよく議論される。小職は、そんなことは無いと思っている。例えば、会社で部長がいない、課長がいない、あるいは係長がいないでも、重要な問題などが無い限り、ルーチンワークの仕事なら出来るのと同じで、上司が居なくても仕事をする人はするし、しない者はしないものである。また、やる気のある者は自分自身でどんどん研究して前向きに行動し、見かけはやっているようでも同僚から見ればその実力は一目瞭然である。

犬も同じで、捜索（獲物を発見するまでの動作）あるいは追跡している時等でよく分かると思う。小職は常時十数頭の犬を飼育しており、当然その中には部長、課長、係長と一応ランクは付けているが、訓練（狩猟）は狩る山にもよるが、課長と係長それに2・3頭の訓練犬を同行させている。訓練犬が段々と力を付けてくる（お越し・追跡が上手くなる）と課長を外し、次いで係長を外し、実力を確認している。そして実力が確認できれば、暫くは訓練犬のみで山に行き、手ごわい獲物が出て実力が発揮できない（お越し・追跡が出来ない）場合は、逆に係長を入れ、それでも駄目なら課長を入れ、そのテクニックを習得させている。ここで大事なことは、訓練犬に「我々はまだまだだ！」と自覚させ、同時に上司をリーダーと認識さすことを考慮に入れ訓練している。

最後に、この様にして訓練犬もめでたく狩猟犬（一人前の職人）となるのだが、狩猟となると自分勝手な行動は慎みリーダーの下、一致団結して主人に獲物を提供する。これが真の狩猟犬と言える。

付記・・・犬舎で訓練犬がやかましくする（鳴く・騒ぐ）時、その犬より上司の部課長を叱ると、おのずと鳴きはおさまる。自分が悪いことをしたのに上司が叱られることで犬も恐縮しているようである。これが確認できたら、縦の関係（組織）が完成となり、パックに秩序が生まれ、獵果も上がる。

—完—